

文苑雜纂拔書

和書門		二五九八	類
二〇	三九	六八	七
冊	架	函	號

內閣文庫		和書
二〇	二五九八	七
四架	二〇冊	號

內閣文庫	
番號	和 25987
冊數	20 (4)
函號	201 39



文苑雜纂拔書

四

寬文八己年卷目錄

一歲旦連歌發句 十一句

一賴元朝巨偈 一章

一中秋和歌 一首

一空觀和歌 九首

一井上河内書 和歌 八首

一新院御製 十六首

一松平信緣書 和歌 十首

一新院并法皇御製 二首

一松平鐵齋書 室和歌 十首

一三条殿和歌 二首

一松永左衛門和歌 二首

一井上河内書 和歌 一首

一長嘯 和歌 二首

一月和歌 一首 刑部文

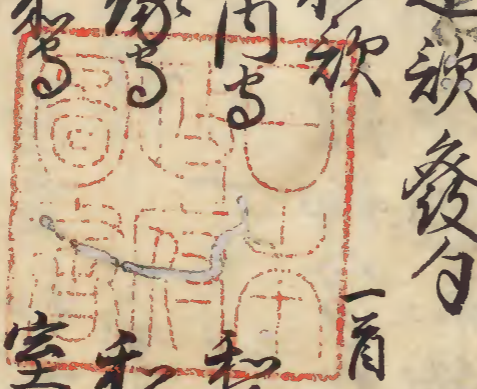
一保科肥後書 和歌 一首

一鴻田義孝和歌 十首

一廻文誹諧百韻 并序 長政九政

一光義 和歌 二首

一井上河内書 和歌 一首



一正月十一日殿中御連歌 十二首
一松平信房与国政通记并和歌 四十首

同 寛文六酉年卷目錄附丁未年

一正月十日御連歌 十二首 一立春和歌 一首

一隅田川云家丸和歌 十首 一洞室心并国政和歌 二首

一歳言和歌 一首 一丁未正月十日御連歌 十首

一歳且發句 十四首 一元日和歌 一首并發句 一首

一新院御書在御舎和歌 十五首 一新院月次御舎和歌 二十六首

一東照宮御夢想和歌 一首 一飛鳥井及富士和歌 二首

一新樹時鳥和歌 十三首

一云家丸和歌 十一首并信治也并 一首

一古寺和歌 十三首

同 寛文八戌申年卷目錄

一元日發句 十五首 一正月十日御連歌 十二首

一云家丸富士和歌 六首 一元政辭世 一首 二月十日

一歳言和歌 五首 一月前懐旧和歌 十四首

一十色文字

同 寛文九己酉年卷目錄

一正月十一日御連歌 十三首 一元日和歌 四首并發句 十五首

一云家丸富士并縁中和歌附立家丸和歌 十五首 此歌 十一首

一奥村随安上已更衣和歌 二首 一系於所婦人辭世 一首

一今表帯力中多中野也小室系也通政和歌 六首

- 一 云家名隅田川和歌 一首
- 一 名月和歌 六首
- 一 殘象和歌 四首
- 一 名光親王和歌 一首
- 一 金盃節力和歌 二首
- 一 名月林澤御舎 七首
- 一 馬丸中院日野殿和歌 二首
- 一 松賀 遊年詩歌會内侍 一章 和歌 四首 後白 二首
- 一 智月院文隅田川和歌 一首
- 一 欽不知和歌 二首
- 一 出浦八系頌

文苑雜纂 已

歳旦

阿つまのけしや娘しき老志春
 常や祿乃歩つけよけさ乃る家
 今朝の春
 長采かりんれんも
 古年れ馬や遊年れしりきめ
 君れさく年きりせぬや花の春
 年法や家めかきり志女神
 志しぬきや節ぬりれ松るや
 久しくれ孫や身餅いしりり
 子代侍や松乃きりぬるの春

昌程
 昌蔭
 昌勃
 玄祥
 玄札
 未得
 立志
 未豫
 卜養
 辰室

或は神や長きあ——甲辰中秋

筆書

偶作偈

頼元

出生此土絶知音通貫天地亘古今事物分明
又齊施透春風入万家我何時向孰述斯心

甲辰中秋

石川棠入

秋の月しつゝ河ねも分て今宵をけ——
乃ら老ねひる光の

空観

よくはれ文よくはれ流てしねうきハ常——
志こころそ
父もよく母もよくそ真の常此つひちんこころそ
世しんの志中これハ何もあ——
常なるは書中書は
常なる道乃る常れ教常ん乃道ハ丁もなるもつひ

手振振神は仏の家をわて我し知こころまわらまことし
折杖しうらあ林下飛料しじふ知こころつひ常なれ
折らり常れうらの河し流れ知しり常なりしりなり
因なりは常なり常れしり常なりしり常なりしり常なり
つひこころ常り佛の常なりしり常なりしり常なりしり常なり

暮秋

井上河内書

とよめ人きくくさる乃る常なりしり常なりしり常なりしり常なり
秋は笑いあるの山志し常なりしり常なりしり常なりしり常なり

言辰和尚追善

あは甘くは念れしり常なりしり常なりしり常なりしり常なり

述懐

あは甘くは念れしり常なりしり常なりしり常なりしり常なり

後朝戀

撫雲はら稀はしつれ川こしぬぬはまうねのあまはあまの
心外無別法

披書省身

結一たくりき成れ筆の致はらるる成るるあまはあまは
三十歳言

まときくわらあこれこの業はまは悟えぬる一れ書る
書有交音寛文三曆二月十二日 新院御製

うひこの勢いれぬれ之思乃るおの志はあまはあまは
水無殿御法樂若菜 日二月廿二日。願

聖廟御法樂海迎霞 同二月廿五日

浪をせしむるはあまはあまはあまはあまはあまはあまは
松迎春新 寛文四曆正月十八日

住言御法樂立春 同六月朔日

とみよりやあまはあまはあまはあまはあまはあまは
梢蟬

君心

あまはあまはあまはあまはあまはあまはあまはあまは
玉津島御法樂浦霞 同六月朔日

あまはあまはあまはあまはあまはあまはあまはあまは

松雪

たきつる枝よりあてられぬはなうくぬくくつるのゆきよ
寄 枕戀

かきつる枝よりあてられぬはなうくぬくくつるのゆきよ
氷無瀬殿御法樂夕暮 同六月朔日

まはるといふまじや山本志和といふ文戸にうきものぬく
聖廟御法樂まき川より 同六月廿日

まはるといふまじや山本志和といふ文戸にうきものぬく
秋より川を

まはるといふまじや山本志和といふ文戸にうきものぬく
屋より月を

まはるといふまじや山本志和といふ文戸にうきものぬく
流るる屋より月を

鶴伴仙麩

洞よりうりにあをせ乃後ハるる露の糸の衣あつとわすぬよ
不邪淫戒

杜若

あつとわすぬよ
春朝

山家詩卷

山乃隈の雲もゆるし
深心花

はらうまのうきはあはく白雲れたくとるるをぬふるるる

帰雁坐

羽やもあまのしきく登りて雁乃くはやゆらら

新樹

新よれこゝを保そるのめさみやうりしなうしぬる

雲出塞

とこりけふとさるれや塞らういふてさる雲うら

秋状

病の文發然はる記事さるあつれゆる庭乃たきさ

落葉

らううせぬ木の葉にうや何とつ風ゆらせたる文とこ

忘行

まのひえぬる地すとうとゆらもいふてさる忘がれ

詩意

あしんあう首いおのあよいるんたひ乃ねのこ

新院御製

九手に九よりみまはなうしきよは事いれとありし

野中杜鵑

法皇

少初てあぬゆ中れ時名足違ふそそとるよ久し

早春

越兼忠室

きれさうまふしきて東海や開乃名も之物る

春田雨

小山田乃苗代あやますしむらふらうしきぬちる

山家待阿香

志のひきあわわすきうそ宴とれ世乃介らぬ山家

夕納涼

ねむい秋やうひてほろきどり夕の月袖をたす

七夕

七夕ハニール一夜いっしほしきき夏中乃夜とたまり

月前草花

新やと尾流り露と吹く月に月うらみゆく秋風

山家秋夕

夕暮れ秋よのきくぬ山形うらき世よゆるんきまら

初雁

帰山阿りもきれきてさるやうれうの海にゆへにきき

時雨雲

はるたれや世乃こころと神世月えよ志くれ乃雲やをき

枯野

秋小なり多種乃花のまくとおれのくまふたよりして

遠村雪

一毛一けりりならにすじくれらうとあふあふたう下

歳暮

一年と何にうすて此うり行しや何乃んるるら舞

祈逢戀

思ふきよいしういあのとこはらにんそい神きつらんか

不逢戀

あふ下ハおしりしけもむし某すむはらうあふなな

寄杉屋

君れとよくこころれ花とえねよあふれかけあふ

右十八首ハ三十一首之内
法皇勅點十五首也。

野夏草

三条

さよと夏道一花の御りたり 昔中と兼れ志有り あり(三十一)

今

庭夏草

拂(三十一) 御りたり 庭乃夏れ思へハ中道ハ庭より有り

松永を命たり

身とちるんいふにと 狂きハらるる亦ぬくもきある

理一分殊

今

異物ハことなるこそハ異なり 縁あり 異なることなるぬきもや

太れ奇と見え申

井上河内ち

夢うして報らん 知んことぬらうことなるぬき縁中志あると

吉野見花

長嘯

山花よ花の御りたり 吉野川未りともすてんぬ人れぬ
かくに花とハいんー 吉野川 雪こそ白く入るる城はあ
月

刑部大輔

仁よとあてんる 吉野川未りともすてんぬ 秋は夜の月

鳥の御りたり 鳥の御りたり 鳥の御りたり 鳥の御りたり
あついと 同ハその代 鶴の鳥よりしきをれハわく
いひきり 保科能彦ち

そりあてんる 鳥の御りたり 鶴きてしゆくハ物なるおれ

初春草

嶋田氏義孝 市川三郎

まなれくし 鳥の御りたり 鳥の御りたり 鳥の御りたり 鳥の御りたり

山辰

非也夜のあふハ唯て辰と云ふ梅のさけ

浦辰

まのあまのそね梅のさけ風よあひくやまの辰あま

梅薫凡

袖よめさけむいものきく梅の香こそよまれ凡

宿梅

いめさくくかく今昔のしんが梅のさけ

春月

村雲のそねえいたるよて以る梅のさけ辰の月

春春

つゆくまれ日影やまの川あふ辰のさけ

待時鳥

くさくさくさくさく村の梅のさけ辰の月

初秋月

あつ秋とては使もちきり梅のさけ辰の月

廻文之詠諧

山縣氏

あつ秋とては使もちきり梅のさけ辰の月

あつ秋とては使もちきり梅のさけ辰の月

あつ秋とては使もちきり梅のさけ辰の月

Quintessence of Science in a Nutshell

the first part of the system is the

the second part of the system is the

the third part of the system is the

the fourth part of the system is the

the fifth part of the system is the

the sixth part of the system is the

the seventh part of the system is the

the eighth part of the system is the

the ninth part of the system is the

the tenth part of the system is the

the eleventh part of the system is the

the twelfth part of the system is the

the thirteenth part of the system is the

the fourteenth part of the system is the

the fifteenth part of the system is the

the sixteenth part of the system is the

the seventeenth part of the system is the

the eighteenth part of the system is the

the nineteenth part of the system is the

the twentieth part of the system is the

the twenty-first part of the system is the

the twenty-second part of the system is the

もよひのりかゝりしにきりしむらさき

あはれなきまゝにきりしむらさき

あはれなきまゝにきりしむらさき

あはれなきまゝにきりしむらさき

あはれなきまゝにきりしむらさき

あはれなきまゝにきりしむらさき

あはれなきまゝにきりしむらさき

あはれなきまゝにきりしむらさき

あはれなきまゝにきりしむらさき

あはれなきまゝにきりしむらさき

あはれなきまゝにきりしむらさき

あはれなきまゝにきりしむらさき

あはれなきまゝにきりしむらさき

あはれなきまゝにきりしむらさき

あはれなきまゝにきりしむらさき

あはれなきまゝにきりしむらさき

あはれなきまゝにきりしむらさき

あはれなきまゝにきりしむらさき

あはれなきまゝにきりしむらさき

あはれなきまゝにきりしむらさき

あはれなきまゝにきりしむらさき

あはれなきまゝにきりしむらさき

可いなりなりぬ事と百々にけりて
 名にたるもさかへりていふにさし
 神におひてきひりにていかにあつて
 何とものよふかへりていかにあつて
 するにさしいふにさしいかにあつて
 辰辰といふにさしいかにあつて
 巳巳といふにさしいかにあつて
 午午といふにさしいかにあつて
 未未といふにさしいかにあつて
 申申といふにさしいかにあつて
 酉酉といふにさしいかにあつて
 戌戌といふにさしいかにあつて
 亥亥といふにさしいかにあつて

破

長頸丸

云年一毫廻文志廻結と何れにさし
 此欵地に郡事少廻文志廻結持せしと
 自中自立し地とさし丸の一事とていふ

西にハきし事さくあつてとて
 一とていふにさし
 一とていふにさし

初秋

源光義

尾州 後光友と改

此乃着いまりにさし
 一夜さし
 同

身日か以りその山路に接れ
 夏に寝る事
 此の云は

述懐

井上河内守

人さし
 正月十一日 殿中御會
 衣をけしは
 事さし
 居りて

御

昌程

玄祥

ゆめくもしむゆる浪は

月うつるまゆの影の白ぬよ

あひきりあはるる庭の雪は

形ももも笑一籬乃萩の枝

霧はあましくこころをさぐり

静かといふよ中道の秋の日

こゆりくくくくく後次の水

霧かきて竹棚橋と流るる心

此よじくる約いふ声

文苑を体およむる道記 細政

三年のまらつた事よきては昔よすま結ぶれも何て

たこころはまよるまをわらへまといひよはゆきてやうく

ふ月の影らやまひの影くさるる水もまらるる國よ田

ひてはもろくさういふまにまをね一ゆふよがねく

いねんしとれるは一柳ひま月まらるるまねい

とゆらひ一名結わらにてまおけやまね一わねの

あま一まにまらるるまらるる一まねかぬかぬ

川乃まゆやよまのまらるるまらるる一福

まらるる結ぶれ

猿まらるる福まらるるまらるる一まらるる

まらるるまらるるまらるるまらるる一まらるる

まらるるまらるるまらるるまらるる一まらるる

まらるるまらるるまらるるまらるる一まらるる

まらるるまらるるまらるるまらるる一まらるる

仍春

堯盛

榮子

其阿

昌勃

周真

昌倫

昌蔭

昌益

しるしをいへりて

吾らへてうとに候は今まにたしに候る秋の如く
日教のうらやまのききりたる様はしるしを候て
い候まてと名候とてうとに候るは候まてと
候まてと名候とてうとに候るは候まてと
その候は小国系乃とくたやと
其三日のうらやまのききりたる様はしるしを候て
あねといひてと名候とてうとに候るは候まてと
しるの候はしるしを候てと名候とてうとに候るは候まてと
と名候とてうとに候るは候まてと

浮き上りのうらやまのききりたる様はしるしを候て
しるの候はしるしを候てと名候とてうとに候るは候まてと

業小きに候るうらやまのききりたる様はしるしを候て
えられてころは候はしるしを候てと名候とてうとに候るは候まてと
なる候はしるしを候てと名候とてうとに候るは候まてと
これ候はしるしを候てと名候とてうとに候るは候まてと
しるの候はしるしを候てと名候とてうとに候るは候まてと

山一のものやふれ候はしるしを候てと名候とてうとに候るは候まてと
山一のものやふれ候はしるしを候てと名候とてうとに候るは候まてと
山一のものやふれ候はしるしを候てと名候とてうとに候るは候まてと
山一のものやふれ候はしるしを候てと名候とてうとに候るは候まてと
山一のものやふれ候はしるしを候てと名候とてうとに候るは候まてと
山一のものやふれ候はしるしを候てと名候とてうとに候るは候まてと
山一のものやふれ候はしるしを候てと名候とてうとに候るは候まてと
山一のものやふれ候はしるしを候てと名候とてうとに候るは候まてと
山一のものやふれ候はしるしを候てと名候とてうとに候るは候まてと
山一のものやふれ候はしるしを候てと名候とてうとに候るは候まてと

ここの川の源は、
うづら山よみりて

折志もなれぬ川は、
はいつて秋のさきの
山くさるるに遠き方
しきいつたての
海やうて

あつたひの
のほの川よみりて
あつたひの川よみりて

あつたひの川よみりて
あつたひの川よみりて

あつたひの川よみりて
あつたひの川よみりて

あつたひの川よみりて
あつたひの川よみりて

あつたひの川よみりて
あつたひの川よみりて

わいさうめいしは筆の初とんは筆はあていすえあぬを
れいさうめいしは筆の初とんは筆はあていすえあぬを
わいさうめいしは筆の初とんは筆はあていすえあぬを
わいさうめいしは筆の初とんは筆はあていすえあぬを
わいさうめいしは筆の初とんは筆はあていすえあぬを
わいさうめいしは筆の初とんは筆はあていすえあぬを
わいさうめいしは筆の初とんは筆はあていすえあぬを
わいさうめいしは筆の初とんは筆はあていすえあぬを
わいさうめいしは筆の初とんは筆はあていすえあぬを
わいさうめいしは筆の初とんは筆はあていすえあぬを

石堂よひきてまねくわくさうの結る
石堂よひきてまねくわくさうの結る
石堂よひきてまねくわくさうの結る
石堂よひきてまねくわくさうの結る
石堂よひきてまねくわくさうの結る
石堂よひきてまねくわくさうの結る
石堂よひきてまねくわくさうの結る
石堂よひきてまねくわくさうの結る
石堂よひきてまねくわくさうの結る
石堂よひきてまねくわくさうの結る

報はあむくほの藤をかきとてあつりて
報はあむくほの藤をかきとてあつりて
報はあむくほの藤をかきとてあつりて
報はあむくほの藤をかきとてあつりて
報はあむくほの藤をかきとてあつりて
報はあむくほの藤をかきとてあつりて
報はあむくほの藤をかきとてあつりて
報はあむくほの藤をかきとてあつりて
報はあむくほの藤をかきとてあつりて
報はあむくほの藤をかきとてあつりて

こゝ海といふはわいさうめいしは筆の初とんは筆はあていすえあぬを
こゝ海といふはわいさうめいしは筆の初とんは筆はあていすえあぬを
こゝ海といふはわいさうめいしは筆の初とんは筆はあていすえあぬを
こゝ海といふはわいさうめいしは筆の初とんは筆はあていすえあぬを
こゝ海といふはわいさうめいしは筆の初とんは筆はあていすえあぬを
こゝ海といふはわいさうめいしは筆の初とんは筆はあていすえあぬを
こゝ海といふはわいさうめいしは筆の初とんは筆はあていすえあぬを
こゝ海といふはわいさうめいしは筆の初とんは筆はあていすえあぬを
こゝ海といふはわいさうめいしは筆の初とんは筆はあていすえあぬを
こゝ海といふはわいさうめいしは筆の初とんは筆はあていすえあぬを

実の事とありきし國の事なるものごとくいふ
方は一人づつは不為すといふ事しんぞいふ
鳥をとりあふとこそせて何とぞはしるぞ
ぬらして好む事と我段にほきて出りぬれぬ
ぬじりこそ捨りしは堂ありこの事なり南よはる
ありしことしあはるしこそ東海道の紀事とて
福くまははゆき縁一道の事と世にあり時移りて
いまきれたるにさる百こそあまりに成るは東
より水のしるはゆきこと終て今の橋より
る一事の事とて

道の事なるもの借の事と一橋の事と世にありし
ありしものごとくにひらりともしひりて
いまきれたるにさる百こそあまりに成るは東
より水のしるはゆきこと終て今の橋より
る一事の事とて

うまきとありはふりたること
物一に根の上と名にゆかしは
く川より田橋何事とて
國にゆかしはもやとありぬ
よはる事とありぬとありぬと
るにんこと結きぬとありぬ
門すきとありぬとありぬ
なく此のつとく吹きぬとありぬ
はるこの夕日とありぬとありぬ
いでしらすき比絶てありぬとありぬ
あぐまの事とありぬとありぬ
むらりんちんありぬとありぬ

けあひなりけつて嘆かぬあまらみ奥にう
くや言ひりくやみぬ神あきひのよりのめ
おしりくあまらみあたま

たいのまゝいろ屋をすれよくききて何夜もとくと
とけりよ室に名もあやふくゆらひまのなをし
こよ平ひあやとそ縁の名もあやふく夜とよ平の夜
しりまをてけりふたさたあやましりふ山寺あり
こつてくふふくくまもき言いけが地酒時
酒あやひきしとせむのち甲えかりしめしあ
ぬうろくしよ帰もも酒飲あふらゆよあやうら
るふき木いやんれりの出入りあやうら民の家
よ成はることいふよそもあやうら

たは若れ民の家病成あやうら何またとせと神の
らりよといふまよ望のほとやとあやうらあまじ
道うさうらにみさ寺とらひてひひくはあまに
まきとけりくはりて里人あまひまきまきあや
その数とらうらうらうらあまのあまにまき
とらうらとまき

西海にあやまるとくまきのひんたに名れぬ
ほらうくあやうらにほきぬけ文社の者よま
あまのこいとと神のいそ井とてあやうら
あまのこいととあまのあまひとよとくまき
今日よ日うなになひまきとよとこのあやうら
ゆらうくとあまのあまらまきとあまのあまら

阿蘇の山をめぐりてくわんくわんとして
 阿蘇の山をめぐりてくわんくわんとして
 阿蘇の山をめぐりてくわんくわんとして
 阿蘇の山をめぐりてくわんくわんとして

阿蘇の山をめぐりてくわんくわんとして
 阿蘇の山をめぐりてくわんくわんとして
 阿蘇の山をめぐりてくわんくわんとして
 阿蘇の山をめぐりてくわんくわんとして

阿蘇の山をめぐりてくわんくわんとして
 阿蘇の山をめぐりてくわんくわんとして
 阿蘇の山をめぐりてくわんくわんとして
 阿蘇の山をめぐりてくわんくわんとして

阿蘇の山をめぐりてくわんくわんとして
 阿蘇の山をめぐりてくわんくわんとして
 阿蘇の山をめぐりてくわんくわんとして
 阿蘇の山をめぐりてくわんくわんとして

阿蘇の山をめぐりてくわんくわんとして
 阿蘇の山をめぐりてくわんくわんとして
 阿蘇の山をめぐりてくわんくわんとして
 阿蘇の山をめぐりてくわんくわんとして

日なれどもいふらうに粒よりあて水にいしんくは
乃とくとぬりてせし乃も指とりしるこそ

中乃海や浦は清く志水となりあつるせられたる
八町ありていふ松よりとらるるは山ありきなり
松よりいふはよのいなしれはなりやめると
人よひ結をぬき世に本をいふ人海濱に
うちいふせいあ〇平の海とていふは
なまは坂ありていふと成せしは町なり
かたらふ大津つよぬ実よ政編よりいふ
くさるるそとむとけあよまらしむておたり
二年ありたり見たりしなりおほふおいら孫
ひまはりて中くそむいぬれそはおほいぬき

はてふらうとせむらうはしむらうはしむらうは
恒能くこゝろにいひておらふよひていづく
けさしむらうありあひある日え眼さすなまじ
は身中仰ありてぬきぬきさきとていふら
いもえ眼にぬきぬきぬきのありたり

らきとらふよとらふあひぬきぬきのぬき
之日けいあよはく日あぬぬきぬきぬきぬき
あふ飯の園の志水とてぬきぬき

おらうよち新やうらん運飯の園は志あふ今いづく
ひらきぬきとらふぬきぬきぬきぬきぬきぬき
とらふよち新やうらん運飯の園は志あふ今いづく
夜よもぬきたらふぬきぬきぬきぬきぬきぬき

幸よりよ新のいそくるるやとにまゝうてぬ存くまで
 やとらひて一乗におぬえの君の侍(ゆきぬことと申
 あまりうらひいしは今もさくららゆくおちりて逢
 娘—はたふいしあきらみぬ—は守のい何れを
 地—は法ききも内房の御好く御—ませりも
 家門吹くらんこととあら—もは職をうらう書
 いらよあもとも物弁くらんこゆきあきまう此
 下子ほておころり給いとしけいたり—ま
 うあらうぬおれさ事—はあきらみぬ—秋といひ
 あきうらひげ道よあらりあぬは真とりのか—
 終ね二年おらりの和流しそ流—あらうき方に
 東といて休えの星よゆぬ

四日幸よあましの念志ささるるうた結と—いよあまあぬ
 約多るよ今も女まほてういとはあらひて日暮る
 比川霧とらえん物—とまらてあまをひて
 淡川と清也くお何—ま後を渡の城らうらな
 ましん雅いの水車字もゆれくあらしも世とつら
 本然—よんそあまきんやういせあまの所にはに
 さう—なこりおとらるたきうてひ流—の時
 しんりよう子とつらあよれり物りあをれら
 表えらうらう母日ううらうつくるき—
 るあ子うらひいていなのはよと—おぬけの浪跡
 とハ丁名とわよあまそこ死けりそらうきとら
 ねら地何ししうきかたに中あてか—あまけ

うらなむねひるあそとありあけと信といふ
はよまをそくもひなうりあ路とそとくる
んして又あうりあり也

まゆのうらうらいほくと信のうまひ
ありやうくあうの浦波とくるは夜もあけは
あれねあふうりきらうりあ

あけのうらうらいほくと信のうまひ
八海家のうらうらひるあうりあそとくる
うせとあうりあうりあうりあ
うらうらうらうらうらうらうらうらうら
たあむひるあうりあ路のうらうらうらうら

あけのうらうらいほくと信のうまひ
夜もあうりあうらうらうらうらうら
あうりあうらうらうらうらうらうら
事うらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうら

あけのうらうらいほくと信のうまひ
あけのうらうらうらうらうらうら
あけのうらうらうらうらうらうら
あけのうらうらうらうらうらうら
あけのうらうらうらうらうらうら
あけのうらうらうらうらうらうら
あけのうらうらうらうらうらうら
あけのうらうらうらうらうらうら
あけのうらうらうらうらうらうら
あけのうらうらうらうらうらうら

よきことありや之紫のきりぬく書つひたつた
くもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
はきりぬくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
くもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
くもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく

文苑雜纂 丙午

正月十日 殿中御連款

生えん小松れ敷もあこけ春
裾ゆも山も雪とくも比
か日子八をこま 星ハ生家めて
遠寺 田向も渺もるも
漆もりたくく 茅造の道 細み
川音おつて 友鶴れ敷
月梅る浪もや 雁のりもつしん
秋川 毎田むしん くの志也地
松原 陰も河も 水の名をれ
志る事とん 好もあれ 夜れ 夢

昌程

御

玄祥 仍春 堯盛 常善 其阿 昌勃 周宗 昌倫

秋のうらやまのまじりて国はなすよ
冬もや秋のうらやまのまじりて

昌隆
秋筆

立春

以盤

冬宗一秋の春のうらやまのまじりて
秋のうらやまのまじりて

角田川也

照高院宮

秋のうらやまのまじりて
秋のうらやまのまじりて

聖護院宮

秋のうらやまのまじりて
秋のうらやまのまじりて

秋のうらやまのまじりて

正親町

秋のうらやまのまじりて
秋のうらやまのまじりて

飛鳥井

秋のうらやまのまじりて
秋のうらやまのまじりて

橋上西

法皇

秋のうらやまのまじりて
秋のうらやまのまじりて

鳥丸

秋のうらやまのまじりて
秋のうらやまのまじりて

秋のうらやまのまじりて

三条西

秋のうらやまのまじりて
秋のうらやまのまじりて

秋のうらやまのまじりて

今

秋のうらやまのまじりて
秋のうらやまのまじりて

富士

今

秋のうらやまのまじりて
秋のうらやまのまじりて

同

飛鳥井

雲中御の雪舟走八月花乃あやふぬ少りし阿摩とて見ゆ
天樹院 三まうりあり一時

綱重 甲府

遠くしむしよの阿ぬ少とて遠志のあまういふはあやう
此一

綱政 仁平位階

いふことお海神のまねたまふことお祭のま

歳言

水原

いふことお海神のまねたまふことお祭のま

文苑雜纂 丁未

正月十日殿中御連歌

云れ兼もあまうて去やあやれ兼

本余あうりる秋津浦を

ゆほのよ大海系や辰らん

月もすた辰あつる辰

初めきけいああ松美えて

柔打さう子孫忠衣手

分ある山路ハ幸寺朝朗

枯てそよあく小篠 正村

雲傳ひなうあや水はけはにて

まうあつま日乃初る園わ

御 昌程

玄祥

昌勃

堯盛

常与

其阿

周英

昌輪

昌隆

さきよとしのいねぬれくる川ひん

歳旦

いはよりまやとくはくしよのま

をねまの春をねむかくる為殿

言はぬあに若てや四方志はる

くころぬらやうらと乾のま

ゆよ子百りきたるひまうりのま

ことまけきみと教ふるまのま

あつて子ちりぬる春日うら

發句

君う代やこせひつりた年のま

神と君のうや幸ふいといかえ

柳葉

昌程

昌陸

昌勃

昌輪

堯盛

吉深

玄岡

玄札

未得

未塚

満利

元捨

未音

あさいいひむらのまのぬら
咲梅のあやみ徳の國のくる
ちんくうぬるまやせいたいに
年佳よはは神位の鷹うら
ゆいころ文ハ七早れ神うら

元旦

以般衆

君と臣とあつるをてはまふはこよのまよまやまのま

高平法後也

高道

武親中の方資子屋のま
新院當座探題

九月十三夜

輪王寺宮

あつるにみちや勢乃えとまきころ長月の秋をかきて

願上月

飛鳥井兼大納言雅章

中夫よみるくけりもくひの雲くさる月ハ一きり下して

園上月

鳥丸右少弁光雄

くねむほに松やまのまやあつんじふひの島よの海る月影

原上月

平松中納言時量

あしよよ月影さくゆめ守河一の系村あめり名持と

橋上月

高野修政史保春

さやろる月小々音ハ星ハ人ハ澄舟しきくぬせしれ中橋

河上月

万里小路中納言雅房

比日るよりの河床乃旁くれて文り元ハ月そまやけり

江上月

中院源大納言通茂

こよひる夜たかり一あゆきゆる河は塔江の月よこりて

池上月

今城中將定信

あつをくん産くうりあふさくうりあひ玉乃内池よる月影

海上月

聖護院交道寛

うりろる月よこりひの垣る浦の燈しをハ行よん

湖上月

桂宰相昭房

志賀の浦や比良の根たうに秋月^浪波流るる常は月影

月下萩

日野大納言弘資

晴ゆる雲る月小風や川あももくぬ庭乃小く此と

月下葛

新院

冷ゆるあつを月影のあつさくくさくさく葛れん此と

月下菊

鳥丸兼大納言資慶

おゆよさうくくよそのきく後の名もて月ハあつ

月下紅葉

風早實權

ふらふらとみれば葉も照ほさる月わろくの文とくうて

持明院三位基時

寄月旅行

伯三位雅喬

あふりまれの夜もくも月影もあきおて旅のころもくうて

難波左中將宗量

寄月旅宿

外山左兵衛佐宣勝

きひ衣の夜のまよとけりきね月とくやころあふりま

櫛笥隆慶

寄月眺望

田向中務大進資冬

遠くぬき舟の音とて夜の月にせほくの秋とくまき

新院

寄月神祇

新院

世成てく次神のあふりまの月とくやころあふりま

尊敬一品法親王

寄月神祇

道寛法親王

はくあれやうらまのあふりまの月とくやころあふりま

道寛法親王

たれあこしうらまのあふりまの月とくやころあふりま

あふらふるをりきりしつらぬ夜とまきてしつらぬ

大炊御門権大納言經光

ませぬの二まうしつらぬ夜とまきてしつらぬ
さうしつらぬとまきてしつらぬ

鳥丸正三位資慶

うあわやうとくしつらぬ夜とまきてしつらぬ
まのつらぬとまきてしつらぬ

丁室中納言雅房

うあわやうとくしつらぬ夜とまきてしつらぬ
つらぬとまきてしつらぬ

森議藤兼昭房

わうしつらぬとまきてしつらぬ夜とまきてしつらぬ
つらぬとまきてしつらぬ

あふらふるをりきりしつらぬ夜とまきてしつらぬ

白川三位神祇伯雅臺王

あふらふるをりきりしつらぬ夜とまきてしつらぬ
つらぬとまきてしつらぬ

鳥丸右少将兼雄

あふらふるをりきりしつらぬ夜とまきてしつらぬ
つらぬとまきてしつらぬ

左京大夫實種

あふらふるをりきりしつらぬ夜とまきてしつらぬ
つらぬとまきてしつらぬ

今城中将定信

あふらふるをりきりしつらぬ夜とまきてしつらぬ
つらぬとまきてしつらぬ

信ふるおきていんれちきりなむけんてさうきとてつらなる

田向中務大輔資冬

朝ふく候そよ氣共たのうにあく白あけあふぬあく
たろやー又信よぬやせん坊ふひぬくいろよふまこん

橋本中将公綱

いづれとておきし秋の氣あはしれ花のいろく
今ふてあふり並にいづれよりいづく夜にちりぬむのまね

筑前守經尚

候氣の色くこたあくあといれかなく先もあらゆー
後うもらきねと似たのまねくつく夜にひやくつあうとん

日野右出年資茂

まねは月を待とけうて候氣れりくたぬさ者とそと
たれ免あきて一夜二夜いさうさるまおしよるうさやハ

高野修理大夫保春

候文よりゆきれ氣のたのうなむき信あぬあそくある
おと人訪甲斐もねくお所のうれくあんなの守うと

權前侍從隆慶

朝ふて死あてさうりに候白よまうきぬ氣のたれと
信よあひなるうも育くたちきれんをまうとあハの家

外山左兵衛佐宣勝

何んれ神子れてらんあきくたえくこたにむとよあさあ
人こらぬうさそけのあふあきてちりなるひく排あねよ

關原合戦前年夢想

東照宮

天下のれきにありぬれど民をゆるぐは照と日の乾

未だんたる吾妻へ下りしる時富士を

飛鳥井雅章

横雲のなるこよもくぬ根の音のむらりて先をこゆく
心づいたおとほはるるてくこくちよぬむる富士の村を

庭新樹

義概

はくここの梢のまよとの庭よをけはるる文を
志を添ふふいし一階おとと定とそくかほ庭新樹

久恒

海田の程を今てあふりたはゆらむる庭れる山

信久

みし花の糸及び一ぬのうらけ難とふのあはれあふ紫ハ

以繁

うきりぬくる城を之りあふ紫はたをぬむれあくの梢ハ

信治

又一まよとあふりぬ散れりおけの庭れあふ紫ハ

常信

藤原保柄の住れ物りしりも海津の庭の池あり

雨後郭云

久恒

鳴りたる色とりとりも杜宇夕のぬれぬまゝ名残り

義概

村ぬれ晴しえの町も方もて鳴りぬるぬる川もよ

杜宇秋はしりまゝこそよ方りて鳴ぬれぬ名残り

信久

鳴りしりも杜宇夕のぬれぬまゝ名残り

玄祥

しりぬれぬまゝの一色も雲も海津の山も鬼

信治

鳴りしりも杜宇夕のぬれぬまゝ名残り

新羅

飛鳥井雅章

鳴りしりも杜宇夕のぬれぬまゝ名残り

隅田川

難波宗量

鳴りしりも杜宇夕のぬれぬまゝ名残り

初秋朝露

仙洞御製

吹りしりも杜宇夕のぬれぬまゝ名残り

明佳来文

同

鳴りしりも杜宇夕のぬれぬまゝ名残り

當りしりも杜宇夕のぬれぬまゝ名残り

中院通村

鳴りしりも杜宇夕のぬれぬまゝ名残り

花より縁と信てあつたふりてあつたをてあつた

信治

天の代は花より縁と信てあつたふりてあつたをてあつた
あつたふりてあつたをてあつたをてあつたをてあつた
山部てあつたふりてあつたをてあつたをてあつた

弘資卿 目野

神風よ吹きてあつたふりてあつたをてあつたをてあつた

五曾路めて

資慶卿

雲あつたふりてあつたをてあつたをてあつたをてあつた

待部

同

らぬあつたふりてあつたをてあつたをてあつたをてあつた

藤行

同

園

同

花より縁と信てあつたふりてあつたをてあつたをてあつた

園

同

花より縁と信てあつたふりてあつたをてあつたをてあつた

古寺

三本高文

古寺の鐘の響きよあつたふりてあつたをてあつたをてあつた

佐藤定利

古寺の鐘の響きよあつたふりてあつたをてあつたをてあつた

山田利貞

古寺の鐘の響きよあつたふりてあつたをてあつたをてあつた

源本忠宣

作

これ上古の寺志新なる松竹うつくしく代嘉成宛ぬん

長徳長次

はる夜の月こころ入古なる女の笑し新と寺とつよ

常根お宗

さよ更て月おえよふはふまある寺れあつる寺れ

市川弘道 なる

いお一孔寺ぬいこくぬえそへたるは法乃勢えらなり

利貝

夜半清

いせくろく夜半の清はなるわき想ふおれ者もあはる

弘道

ふれし夜ふ文りこひたえ中へらるほ行きけりおれ

国徳朝徳

様のおとち教あふの清は清なることよそふは新なる

牛尾正路

ふれくこころこころよまもたれ夜れきていひき清れととら

長徳長次

おれはゆる月こころよひらぬれ移りことよそふは清なる

三木高之

ふれは清文り新なる清は清なることよそふは新なる

文苑雜纂

戊申

元日

わうたかにるるこやいとん屋よあたる
 かなんきやまよハ又つれしりきる
 云よんあひやうけうこさあれ
 今目しやあふあそいのんれなる
 むんねてえよこさるるま日うれ
 然つえんを物めあ水きくこれあ
 身よつるるさうこぬよのんるゆ
 来此や吹西復紙一ういなる
 来たりんやう物やまうし
 名水しきあれや青乃其也

昌程
 昌陸
 昌純
 昌倫
 時春
 昌益
 高順
 玄固
 吉深
 堯盛

四の時ハ見らばやと乾のいんる
去忍よこら志くらり今乾の春
しらくよらりあいらる春自ら
去年今年候加りるや金の事
はられく魚やあや年れ去
さきても祝ひまの試りよ
丁ある代り注やまにく去れ去
てつたー祝言紙事ー先
あひやめる代りせいりやがり行
と乾候はなま令注福あや
年終の二王たつし門まり
たれれにと乾ま事や申利根

奈祐
道南
良甫
幸指
立時
未得
立志
兼老
正粗
安次
正満
幸祐

みるまらしゆ祝やさるのい
と乾よえらくるお書かーい其磨

正月十一日御連祝

春とおていよくあー一足根去
去深うよ丁ある池り鳥鳥
廣き田よ氷なるあ
羽幸よある山以りよと諸
ふあるやあよいよとよ
まくにんるしきし中層り丁
候対の枕り月し時神
細しん国路ハ舞れいよ
まあれいや、まれり小原よ

照久
祐純
昌程
御
玄祥
仍春
竟盛
宗子
基の
昌祐
同英

秋もよきりと終る終の言

昌論

谷乃戸の夕よなわたりて

昌陸

唐のふさの神やいゆりし

執筆

富士山

飛鳥井雅章

去年よりも消ゆる言を後くぬおれし生れ富士はなほ

尺のふとよりわたりや中えれ雲よのせしる富士とみせ

念ゆきくすことよらてい富士は林麓れらるる山

月影と林麓ありて何するる雪成るる富士の志き

正親町少将公通

いふもぬいさよるよぬぬの言りてえよ念れ富士根

中院通茂

わらうさひつくとまれば及よ今この念もき富士は根を

辞世 二月十日

元政

驚れ心はぬよとじてよ思ひありよあはれらにわら

歳言

奥山玄建

いそふし昔年たにたてたしといさくもやきくれな

いそふしいそふし門書よあせと陰り子孫を

月茶懐回

丹治信治

月とわらわれおひし一海りいしとまよふ形りなり

こも高之

去年よりぬ月たにいさくこと思ひ残り少りまらぬ

舟本可治

秋より月よりいそふしとわらわくいしと思ひ袖は

さしぬきとらよたりむしぬ月影りしとあはれ

白井英信

いかにわがこころをよそよそしくや
あつらひの月とみづきく
んきあつる神代は月はいふ
言はらうかぬ秋のさやけは

中川秀為

月よこよひにけり
さきのあはれも
うらみ秋とみづき

内蔵為定

あつらひの秋とみづき
なまじりとみづき
あつらひの月とみづき

長山縁勝

あつらひの秋とみづき
なまじりとみづき
あつらひの月とみづき

横田由

あつらひの秋とみづき
なまじりとみづき
あつらひの月とみづき

山田利貞

あつらひの秋とみづき
なまじりとみづき
あつらひの月とみづき

盛岡林季

あつらひの秋とみづき
なまじりとみづき
あつらひの月とみづき

松葉童直

あつらひの秋とみづき
なまじりとみづき
あつらひの月とみづき

千賀正氏

あつらひの秋とみづき
なまじりとみづき
あつらひの月とみづき

春正

あつらひの秋とみづき
なまじりとみづき
あつらひの月とみづき

宗好

あつらひの秋とみづき
なまじりとみづき
あつらひの月とみづき

宗川

方にほりささるるもハ巧事を志方てもハ巧事を申

十色字

青 黄 赤 白 黒 緑 碧 紅 紫 駟

文苑雜纂 巳酉

正月十一日御連歌

治事るんれ松やあそけ春
長采りよんのとし秋津橋
云れ家の道廣世よ年立て
野山よちの鳥けり名
勢をくゆほけり多深なりし
いりやとに長窓けり人
雲竹のまいくわさよ月人にて
夕アけり方とよさよ川あり
舟と長神に涼し秋の月
雲りし柳教とけり陰

昌程

御

玄祥

仍春

昌純

愛盛

宗与

其阿

周英

昌倫

菅井多太いしむいぬあなむ
今朝誰か〜小田乃申道
歎のいりこころあはれ

元日

口伝やつらぬしむくそり此年

正之 保科肥後守

信祐

昌隆

昌益

まむりけいひなよ信ん改まひるまれりりり

歳旦

奥山玄建

昌隆

昌純

玄祥

吉深

まむりハハ辰一印りあらる
まむりハハ辰一印りあらる
まむりハハ辰一印りあらる
まむりハハ辰一印りあらる
まむりハハ辰一印りあらる

まむりハハ辰一印りあらる

昌倫

昌隆

昌純

玄同

昌益

時春

まむりハハ辰一印りあらる

卜養

調和

玄志

満利

政利

今新也 春中 正月乃りあらる
習法ハハ辰一印りあらる
仁徳乃りあらる
年改乃りあらる
宵の年乃りあらる

はくくぬくつとよの夜はくくはしこ
まともんりさうきんりにす方
天乃春やねん流る末廣川
をららられき川もよきかー川の雲
書初ハるよれ林のわきまふらふ
松をていしう一丘衣のみしるな
くろくけやと別なう道のりう年
ここの葉やゆひ残るよれ様
天う代やかく真目ら初め
去年れめやゆきとひてと別春

竹水
勝奥
宗継
房雅
房英
宗利
重次
一舟
士吉
正恒

元日

春正

海彼根の新葉もあれいしとやと春あはらうと麓の針

宗好

まそん春とゆておけうよ山はくくわととぬおる

宗川

まそん春とゆておけうよ山はくくわととぬおる

不二山

飛鳥井雅章

年くよあふとく家富士の根ハひきなれとこりあ
富士の根ハいそおらんをたくとまらる雲ハ山つとらう

西園寺實晴

集る詠とねくくぬをゆらうき 富士れ芝屋

日飯めて

飛鳥井雅章

夜はまろくはよの中山まろくにいつひのたて餅はまろく

ゆりこめて

實晴

藤人とおむみまろく名ささるゆりこころ者よこまろく

也一

雅章

ほらちりりけ上てて成るくよこそて九子花者こもまろく

山吹の花とたけりまろく

實晴

ほらちりりけ上てて成るくよこそて九子花者こもまろく

也一

雅章

つーゆせいのちりり山吹の花とたけりまろく

まろく山吹のちりりまろく

實晴

おひまを名緒とすはなまろくまろく

まろく山吹のちりりまろく

まろく山吹のちりりまろく

實晴

まろく山吹のちりりまろく

也一

雅長 志茂和泉守

おひまを名緒とすはなまろく

上巳

奥村隨安

まろく山吹のちりりまろく

更衣

今

まろく山吹のちりりまろく

東西洞院也くまろく

まろく山吹のちりりまろく

水曲流

範明 金漢平の

く中川あもよよせ死て流し思守庭の厚り水

忠平 本多下野守

甘きあて白ひれ測をきく春海一河つる橋た流のり

柳通風

範明

ゆき高と松よききくくま柳のあひくハ川乃屋よりあき

影ふ志

長勝 小笠原の道政

まは流とあてにわけくまの程れ流よきとたきまは流橋

八月十日夜不見月

今

よーやんぬ月のりひさきー夜も残面影よて

隅田川

梶井

えんこくさぬ月すま川もころなむんぬぬ

照高院

ゆさこの国全の里に高むぬ水隅田川あぬ海よ

聖護院

形もゆこくさぬ月すま川もころなむんぬぬ

慶長十二年

近衛應山

こくさは家あてこく報もころ河川あてこくは満ーと

まてみるにむしー此國の志くく水と東れすま川ちり

中秋月

山縣文纜

くくくくあゆくえのくくくゆー詩あくぬるくく月報

えんこくさぬ月すま川もころなむんぬぬ

常知
墨類も何きうの如くを看りし可しよ山の隅れ

長次
明もてそのまの如く中に今宵月日のに

成令
今宵月日のに

有治
有治

丹次信治
丹次信治

利重 忠徳氏
利重 忠徳氏

お字 芽根氏
お字 芽根氏

忠英 中法氏
忠英 中法氏

立春
立春

若菜
若菜

時鳥
時鳥

郊花
郊花

あなぬき秋の垣根は白く郊花の鳥

朝雲

明神の月六さきう山の紫にひらりわくあく花のよこ雲

秋野忌時

金源帝の範明

すま水候まおつ秋のそわらりと秋の夜中へ秋やまを

恨絶意

うみといたいあぬあといひあてひひ半をたけしあ

八月十日御會 今上御製

そとひらきちりて秋のそわらりと秋の夜中へ秋やまを

慨月

弘濟 日升

雲みまきゆのえあけしるおのまゝ名もくともめり月夜

月夜一層

阿茶丸 八条

のつらけり方んとてらのぼりまやけき月よるるらん

月夜去

順之 鳥丸 三男

いひまゝの難うあの日影は去のうとてとつて

河月

通實

けり秋の林や水空流川き水海へ浪の上け月

故山月

雅喬 白川

みけり秋の山すじえりまゆの尾上乃まの月け月

新月夜

通實 中院

なと秋の山月あきり月おととあくせし月

禁中 今歌と賜りて

海上 歳

中院 鳥丸

うらまのあきりなりと津波あきり朝の浪は五浪て

長らくの波路いづえちよらうきひさしきよしとて

中院

おち平そくしきまらふとにきまらふとに中良平の辰去れおち

日時

山家集

鳥丸

人あまき山よきあよららふとに何とて鶴の住まひ

中院

歳交りまひらふと松の門こら果しきと夜よららま

日時

あまらびんかきしきまらふとあまらびんかきしきまらふと

水邊集

鳥丸

驚きゆとにきまらふとあまらびんかきしきまらふと

あまらびんかきしきまらふとあまらびんかきしきまらふと

中院

日時

あまらびんかきしきまらふとあまらびんかきしきまらふと

暁抄

鳥丸

あまらびんかきしきまらふとあまらびんかきしきまらふと

中院

あまらびんかきしきまらふとあまらびんかきしきまらふと

日時

あまらびんかきしきまらふとあまらびんかきしきまらふと

故て月

鳥丸

あまらびんかきしきまらふとあまらびんかきしきまらふと

中院

いづよいふにぬれまのこもきてまじ

日野

月とすし合ふにちよき遠きれり

鳥丸

寄書

松林れまはまのれもくさゆにきうすい

中院

あつた夕日空の雲こらてくれぬいり

日野

あつた夕日空の雲こらてくれぬいり

鳥丸

寄書

あつた夕日空の雲こらてくれぬいり

中院

あつた夕日空の雲こらてくれぬいり

日野

あつた夕日空の雲こらてくれぬいり

鳥丸

寄書

あつた夕日空の雲こらてくれぬいり

中院

あつた夕日空の雲こらてくれぬいり

日野

あつた夕日空の雲こらてくれぬいり

鳥丸

寄書

あつた夕日空の雲こらてくれぬいり

神乃高六ちりた深きおまじふもむらりぬきく
懐穢よなき
中院

阿のぬ夜いぬやめてとやあまの仲一様
れやまのいさくす
日中

あまといふよあまてうつよ
江のき夜ともまよき
馬丸

月日細そあまのいふよ
あまのいふよ
仲流

こゝか此ゆめおろく
きよき人いやくる
日中

文苑雜纂

松契避年

常山

松長不被雪霜侵
蟠屈龍鱗數百尋
標天然非所願
仰看節操歲零心

同

玄建

けき一松君よりひのりり
もも庭のあまれ松は
陰りた

利見

松うえよあまのいふ
よて陰るもれこ
君完

たのつゝ庭の松凡
万代も君よ陰り
はありは

成今

松を乃松よあまの
ひて君もる代ハ
あまの松は

あつし時を待

有次

年少や松よ秋に果乃聲

休鼓

笑り多や露下り袖乃非由私

隅田川よ舟とて

智恩院宮

名少し河よ舟と波男とこく船次ゆく此のまを川に

歌ふ見

たき湯統藤原 平室

ふりこもく何とよまのしづかみきたがうらもよきたるが

分

よつとくま経志あつ山の井地りき記ふるたふら

土浦八景 詩畧々題斗記

筑波雙峯 櫻川香流 臼井清泉

東崎衆船 蓮池秋月 寒沼白鳥

民家炊煙 郭内古松

